



—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

イエメン：サーレハ大統領の出国後、初のテレビ出演

6月3日の大統領宮殿内での謎多き「暗殺未遂」爆破事件により負傷したサーレハ大統領が今月7日夜、サウジへの出国後初めてテレビカメラの前に姿を現し、イエメン国民に直接語りかけた。

<包帯だらけの大統領>

リヤードで録画されたこのメッセージ（録画日時は不明）はイエメン国営放送により放送され、中東はもちろん欧米のメディアでもある程度大きく報じられた。カタルの汎アラブ衛星テレビ『アルジャジーラ』の電子版（aljazeera.net）にアップされている動画では、同大統領のメッセージの一部を同大統領の肉声とともに視聴できる。そこに映し出されたサーレハ大統領は、サウジを始めとする湾岸地方の男性の正装ともいえる純白のソウブ（thawb）を身につけ、イエメン国旗を右後方に配置した黄金色の椅子にゆったりと腰を降ろし、低く落ち着いた声で自らが描く事態收拾のビジョンについて物静かに語っていた。

頭には火傷の手術跡でも隠そうとしたのか、イエメンの部族が好んで被るスタイルで、赤と白の格子模様のクーフィーヤ（アラブ世界の一部では「ハッタ」とも呼ばれる）が巻きつけられていた。

ロイター通信などの報道によれば、更に両腕と両手には包帯がぐるぐる巻きにされていたという。これは、暗殺未遂爆破事件の数日後に同大統領の傷が公式発表の「軽傷」どころか、実は火傷が全身の40%にまで達していたことを明かした米国筋の情報と符合する。

<暗殺未遂事故発生の瞬間に関する証言>

この事故の瞬間については、サウジ資本のロンドン発行汎アラブ紙『アッシャルクルアウサト』（電子版）が8日付のトップ記事で、大統領宮殿内モスクのイマーム（礼拝指導者）の証言を掲載した。爆発で意識を失い両足を骨折するなどした、このモスクのイマーム、アリー・マタリー師は、金曜礼拝の冒頭の説教の後、2セットの集団礼拝の2セット目の途中で爆発が起きたと証言している。この時サーレハ大統領は、礼拝を先導するマタリー師のすぐ後ろ、一般礼拝者の最前列で礼拝していたという。イマームのすぐ目の前にある説教壇の下に爆弾が隠されていたという報道もある。また、2セットの礼拝というものは通常、イマームが恣意的に選択して朗誦するコーランの章句の長短にもよるが、せいぜい5分程度で済んでしまうことなどからも、爆発のタイミングの設定など相当手の込んだ暗殺作戦だったことがうかがわれる。

<サーレハ大統領が演説で呼びかけたもの>

包帯や火傷の痕など痛々しい様子はあるもののサーレハ大統領は、16歳で軍隊に入り、一兵卒からの叩き上げで、1962年9月26日革命による教主国（ザイド派イマーム制国家）

転覆後、サウジの金銭的・軍事的支援を受けた同国王党派からなる「反革命」勢力との対決などで勲功を重ねてきた海千山千の軍人政治家である。戦傷などは慣れたものであるかの如く、録画テレビ演説でも国民に語りかける声はしっかりと落ち着いたものであり、少なくとも快方に向かっているという従来の公式報道の正しさが初めて証明された。

負傷直後の晩に国营テレビが放送した映像無しの録音メッセージでは、意気消沈ながらもライバルのサーデク・アフマル部族長の一門を爆破実行犯と決め付けてこき下ろしたものであるが、今回の演説のトーンは、その時とは全く異なるものであった。今回は、野党やライバル陣営を非難することもなく、寧ろ彼ら反政府派に対して連携を呼びかける、至って穏やか且つ理性的なものだった。

自らの辞任表明のような電撃的な内容を含むものでなかったのは、日本のメディアなどの扱いの低さなどからも自明であるが、アルジャジーラ・テレビ電子版の表現をそっくり借りるならば、演説の要旨は「憲法に則った各政治勢力間の連携と対話の重要性を訴えた」という一語に尽きるものであった。

詳細を見ていくことにすると、サーレハ大統領は先ず、憲法の枠内での「権力の分割（パワーシェアリング）」を呼びかけ、「人々が合意するプログラム」に基づいて全ての政治勢力が参加することを支持すると述べた。そして、全政治勢力に対して、与野党間の未解決の諸問題を解決するために憲法を拠り所とすることを求めた。また民主主義に基づき、表現の自由ともう一方の意見の自由（＝尊重）に基づくパートナーシップを歓迎した。

更に、野党であれ与党であれ連携を歓迎することを強調した上で、それをしないことは「後進的」であり「専制的」であるとした。その一方で、現在大統領代行を務めるハーディー副大統領による努力への支持を表明したが、自らの帰国については言及しなかったという。

暗殺未遂とその人的被害についての言及では、4日夜のサウジ入国後、リヤードの病院で8度の外科手術を受けたことを自ら認めた。また、一緒に宮殿内のモスクで金曜日の集団礼拝中に負傷・死亡した首相や国会両院議長など政権幹部の数が合計87人以上にも上ることを明らかにした。後日、国营メディアで報じられた爆発後のモスク内外の写真と合わせて、今回初めて公式にコンファームされた犠牲者の数字は、爆発が如何に大きかったかを物語るものである。

そして、サウジと同国のアブドゥラー国王に対して、自分、そして自分と共に治療のためサウジに来た者たちに対して提供された全面的なケアについて謝意を述べた。それと同時に、イエメン各地に残って合法性（the legitimacy）のために踏ん張っている軍事・治安機構に対して謝意を述べることも忘れなかった。国内外の「偉大なるイエメン人民」に対しては、男女を問わず、「テロ分子（＝テロリスト）」による挑戦に持ちこたえていることに感謝しつつ、「挑戦には挑戦で対峙する」と述べ、自分のライバルたちに立ち向かう意思表示を以って演説を締め括った。

<各方面からの反応>

アルジャジーラ・テレビの特派員は、サーレハ大統領のテレビ録画演説は多くのイエメン人にとってはショックだったという。演説の全てを注意深く何度も視聴したであろう同特派員にとって、サーレハ大統領は疲労困憊の様子だったという。

イエメンのイスラム系野党の機関紙『サフワ』のラージフ・バーディー編集長も、演

説が録画・放送されたタイミングが、1994年の南北内戦でサーレハの北部サナア政府軍が、再分離・独立を図った南部諸県（1990年5月の統一までは「イエメン人民民主共和国」）を制圧・勝利した記念日と一致している点に着眼している。イエメン人の長年の悲願であった統一を守り抜いたという名誉ある日である、この7月7日のタイミングを逃しては、国民に向ける顔がなくなってしまうという見方もできようが、少なくとも披見の限りでは、サーレハ大統領が7日夜放送の演説の中で、17年前のこの「偉業」について言及したという報道はない。

他方、今年1月の抗議活動の激化から常に街頭デモの中心になってきた若者たちのボランティア組織「革命青年連合」のワスィーム・カルシーは、アリー・アブドゥラー・サーレハはもう国家元首に相応しくないとし、サーレハが呼びかけている権力の分割（パワーシェアリング）は、自らが統治不能であることを十分に理解した結果であるとの見方を示した。

<奇跡の生“還”者となれるか？>

ロイター通信は、複数の外交官（匿名かつ国籍の言及なし）を情報源として、イエメン情勢が政治的にも治安上もここまで悪化したからには、サーレハ大統領が健康を十分取り戻したとしても帰国できる望みは極めて薄いと報じている。

帰国を強行したところで、大統領宮殿内に爆弾を仕掛けて、大統領が実際にその場にいるジャストのタイミングで爆破させることができる暗殺企画・実行部隊が依然としてサナア近辺に潜伏している可能性は十分高い。事件後、数十名単位で容疑者が拘束・逮捕されているが、決定的な証言・証拠の確保などの報道は見当たらない。命を捨てても祖国イエメンの合憲性を守り「殉教者」になるという覚悟でもない限りサーレハ大統領の帰国というオプションは無からう。

また、サーレハ大統領にとって大恩あるサウジが取り纏めようとし、その負傷後、再度それを蘇らせようと努力しているGCC調停案（イエメン与野党間の仲介イニシアティブ）に対して、同大統領が肯定的な反応とその実行の担保をサウジ側に与えない限り、イエメニア（イエメン国営航空会社）の特別機が名誉の負傷から治癒した“英雄”を乗せてリヤードの空港から南の国境線に向かって離陸することはあり得ない。

◎本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799